

八幡は革新的な神である。それは、豊前国（現大分県）宇佐で顕現した記紀神話には登場しない一地方神であったが、聖武天皇の時代から頭角を現し、平安時代には伊勢神宮に匹敵する国家神へと急成長していった。また、宇佐で創始された放生会が八幡の大祭となったように、早くから仏教との関係が深く、八世紀末頃には「八幡大菩薩」と称し、神仏習合の先駆けとなった。

宗廟とは、皇室の祖先を祀った霊廟を指す。中国皇帝は宗廟祭祀を大祀と位置づけ、国家を象徴し、支配の正統性を示すものとして尊重した。日本では、伊勢・八幡・宇佐・石清水の三社が宗廟となり、伊勢・八幡「二所宗廟」と呼ばれていく。

ところで、宗廟観を受容する契機は、八幡の総本山宇佐宮をめぐる事件であった。治安元年（一〇二一）一二月に勃発した宇佐宮焼亡は、国家の一大事として捉えられ、朝廷は中国・日本の先例を調査し、宇佐宮を宗廟として対処したのである。以後、伊勢神宮宗廟観も醸成され、宗廟の造営や祭礼は、「宗廟之重事」、「宗廟恒例之神事」、

宗廟八幡と宇佐使

田村正孝

「宗廟祭祀」と認識されるようになった。

では、なぜ宇佐宮が宗廟となったのだろうか。道鏡による宇佐八幡宮神託事件後、八幡は皇統守護神となったが、さらに九世紀に入ると応神天皇霊であるという観念が広まり、天皇祖先神へと変貌を遂げることに成功した。

このような八幡に天皇が崇敬を表した象徴が、宇佐宮への奉幣勅使「宇佐使」である。宇佐宮が京から遠隔地に鎮座したにもかかわらず、宇佐使は鎌倉時代まで二〇〇回ほど発遣された。

朝廷が五畿七道諸社に一斉に奉幣する儀式では、天皇は伊勢神宮と宇佐宮を別格として厚遇した。さらに、一〇世紀末までに、宇佐宮に対し三年に一度奉幣・神宝奉獻する（宇佐）恒例使が確立するが、ここに八幡宗廟が成立する条件が整った。王権・王土守護を期待された宗廟八幡は、伊勢神宮とともに中世神社秩序の枢要に体系づけられていくのである。

（たむら まさたか／東洋哲学研究所委嘱研究員）